

(No. 15)

事例名	土澤・新長屋暮らし
地域	岩手県花巻市（東和町）
実施主体	合同会社 土澤長屋暮らし（代表社員 猿舘祐子）
活動要約	「医」「食」「住」を基本とした高齢者自立支援のコーポラティブハウス
主な分野	「住まい」・「介護・ケア」・「まちおこし」・「コミュニティ・ビジネス」
主な関係者	(株)土澤まちづくり会社（地域住民と市が出資） 合同会社 土澤長屋暮らし（土澤街づくり会社役員を中心に6名） こっぽら土澤（独居高齢者が入居する高齢者向け優良賃貸住宅）
キーワード	コーポラティブハウス／「新長屋暮らし」／「医・食・住」

■活動のきっかけ・経緯

- ・旧東和町の土澤地区は人口 2,000 人の町で、人口は自然減の傾向にある。高齢化率は 33%と高い（平成 22 年）。
- ・平成 11 年 街路拡幅事業構想が持ち上がる。
- ・平成 14 年 旧東和町と地域住民がそれぞれ 500 万円を出資し、(株)土澤まちづくり会社を設立。
- ・これまでは祭りやイベントの時しか人が来なかった¹。土澤地区に人が住んでもらうことを前提とした町づくりを目指そうということになった。
- ・土澤まちづくり会社設立と同時に上町共同化事業の研究会を立ち上げ月 1 回ペースで研究を重ねる。
- ・平成 17 年 商店街を美術館に見立てたまちかど美術館を始める²。
- ・平成 18 年 花巻市と合併。都市建設計画の中で、上町共同化を最優先施策にしてもらった。
- ・平成 19 年 合同会社「土澤長屋暮らし」を設立。地権者のひとりである藤根華園さん（画廊喫茶店主）の言葉「私は土澤が大好きです。生まれて、育って、この地で終わりたい」がきっかけとなっている。
- ・研究会には、早稲田大学の岡田昭人先生を建て替え事業の専門家として招いた。
- ・内閣府の補助金も活用した（新・長屋暮らしプロジェクト）。

■事業内容

●「こっぽら土澤」

- ・「医」「食」「住」が基本で、自立支援のコーポラティブハウスを目指している。
- ・「医」：訪問看護ステーションをテナントして誘致（総合花巻病院から）
月 1 回の「まちの保健室」看護師指導による血圧測定・健康相談
- ・「食」：スーパーが閉鎖されたので、高齢者むけのお惣菜屋を開店、宅配も開始。
ワンデイ・シェフ（食堂）

¹ 「土沢七夕まつり」（8 月上旬）、「土沢まつり」（9 月中旬）など

² 土澤は、近代洋画家の萬鉄五郎を輩出した地である。

- ・「住」：高齢者向け優良賃貸住宅（60歳以上、家賃補助が月3万円くらい）



<こっぼら土澤>



<高齢者向けのお惣菜屋さん>

●資金調達

- ・地権者は等価交換。国土交通省と経済産業省の補助金。
- ・分譲住宅は、6戸のうち4戸が販売（予約）済み。
- ・賃貸住宅の入居者は、東和町出身の70、80代の単身女性がほとんど（古民家に独居していた）。
- ・総工費4.5億円（うち3.2億円の工事費）。設計も自分たちでやった。

●たまり場（画廊喫茶：藤根華園さん）

- ・これまで23年間、画廊喫茶をやってきたが、2011年10月8日に、新生オープンした。



<画廊喫茶>



<猿館さん（左）と藤根さん>

■展望と課題

- ・町村合併が、事業の進展に明暗両方の影響を及ぼしてきた。
- ・これまで距離を保ってきた行政や地域商工組織との連携が次のステップへ向けてのカギとなる。

連絡先	合同会社 土澤長屋暮らし（代表社員 猿館祐子） 住所：岩手県花巻市東和町土澤 8-90 電話番号：0198-42-1331 メール：charo@aqua.ocn.ne.jp URL: http://www.nagayagurashi.com/
------------	---

(No. 16)

事例名	株式会社 しまの会社
地域	愛媛県上島町（弓削島）
実施主体	㈱しまの会社
活動要約	島民出資による「しまの会社」を設立し、島民と外部の人々との交流を図りながら、島おこしを行っている。
主な分野	コミュニティ・ビジネス／食事会／憩い／世代間交流／観光
主な関係者	しまの会社／しまの大学／NPO 弓削の庄
キーワード	島のPR、地域発信、島おこし

■ 活動のきっかけ・経緯

●愛媛県弓削島

- ・愛媛県上島町は、瀬戸内海の8つの島からなる人口7,400人の町である。中でも弓削島（ゆげしま）は、戦前にできた日立造船やその関連会社が立地する島（人口3,500人）であり、島民にはサラリーマンが多い。漁業、農業との兼業で、全体的に裕福な島だったが、昭和50年代に日立造船が撤退した事で、2000人が職を無くし、多くの人間が島を離れた。その後別の造船会社が引き継いでいるが、造船業界の景気はあと数年と言われている。
- ・一方、島には1901年に地元有志が設立した弓削海員学校、現在の弓削商船高等専門学校があり、ここからは、多くの外国航路の高級船員（船長、一等機関士等）を輩出しており、島には「ハイカラ」な気風が色濃く残っている。

●弓削島の島おこし

- ・島おこしの原動力は、元役場職員の村上律子さんである。1948年、愛媛県上島町（旧弓削町）生まれ。38年間行政に携わり早期退職。女性初の課長として就任された経験をもつ。1993年、ゆげ女性塾を15名で発足し、1997年地元お年寄り300人に聞き取り調査を実施し「弓削民俗誌」を翌年に刊行。2004年2月に弓削島の16女性グループでおいでんさいグループを結成。直売所の運営と特産品の開発、体験交流、公的支援の行き届かないお年寄りへのボランティア活動を実施。島の主婦たちで出資し、2008年10月株式会社しまの会社設立。「摘み菜」を中心にした活動を展開。



<村上律子さん>

- ・発起人である村上律子さんが、島民に声をかけ、一口1万円で1,085万円を集め「しまでCafé」をオープンさせる。元々は、村上律子氏が平成17年から始めた、おいでんさいグループ（ゆげ女性塾、10グ

ループから成る)の活動である。この活動は、島の名産品(ひじきを使った藻塩の製塩など)や郷土料理を販売し、全国に紹介していく事である。この活動を継続させる為に「しまの会社」を設立。その経営助言役として、兼頭一司氏が社長として就任。兼頭氏は、県内西条市出身で今治の進学校、東大、大手出版、松下政経塾を経て現在に至る。

- ・兼頭氏がインターン生として愛媛地域政策研究センターに派遣されていた際、村上さんの瀬戸内スローリズムでの講演を聴講、そこで村上さんが名刺交換を求められたのがそもそもの出会い。その後、兼頭氏が卒業前に地域作りのモデルとなる島を探し、島巡りをしていた際に、村上さんと再会。そして会社設立へと話が進み、現在に至る。



● しまで Café

直接のきっかけは農林水産省の農山漁村地域活性化プロジェクトへの事業提案とその採択だったが、背景として、島には元気で、素晴らしい地域活動をしている方々が沢山いる、そんな皆が集まってわいわいガヤガヤ交流できる場があればと、いう村上さんが思いから始まった。

そこでの交流を通じて、島のことをもっと知ったり、新しい島の文化を産み出したり、島の魅力を発信したりする島づくりの拠点となることが「しまでCafé」の目的である。

訪問日、10時に入店した際には、すでにシニア男性が4名、コーヒーを飲んでいた。朝9時から11時頃までは近隣のシニア男性が、スポーツ新聞を読み、コミュニケーションの場として利用している。午後は、その奥様がランチをしに、集まる場となっている。



しまで Café 外観



しまで Café 内部



Café：土産物コーナ



ランチ：小皿料理摘み菜模様（限定 20 食）

● しまの大学

「しまの大学」とは、地域の人たちの抱える困りごとや夢を、地域の中の人だけではなく、地域の外の人や会社などと協力して、一緒に解決したり、実現したりしようという取組。地域の中の人も外の人も、お互いがお互いを先生にして学び合ったり、また共に学生として教え合ったり、地域を教材として一緒に研究したり、チャレンジしたりという場にしていこうという思いによるもの。また、この地域の声を集め、地域の人も外の人も一緒になって課題を解決したり、夢を実現したりというモデルが、どんどん他の地域にも広がっていったらいいな、という思いもある。将来的に様々な地域がキャンパスとなり、それぞれの地域の課題や夢がそれぞれの学部となり学科となればという願いが込められている。

◆ 学部：香りと癒し学部／摘み菜学部／商品開発学部 ◆

しまの大学は、島民アンケートで声の多かった地域課題を学部や学科、地域自体をキャンパスに見立てた参加型のワクワクする大学。地域内外の人や資源といったチカラをコラボレーションさせることによって、「学び」を通じた課題解決や住民の夢実現を図り「希望の島」をみんなで作っていく。学部をつくる第一歩は、島民から出てきた地域課題に対する夢のアイデアを応募していただくこと。（例えば：香りと癒し学部では、特産品のこぶみかんの乾燥葉を使用したエスニックカレーの開発、摘み菜学部では、島の野草を使った薬膳レシピの開発など）

◆ 学生 ◆

しまの大学は、実は誰でも学生になれる大学。年齢・性別・国籍は問わない。地域内外のチカラを集めて「希望の島」づくりの主旨に賛同いただける方は大歓迎。

学生になると、学生証が発行され、しまの大学の授業をすべて受講できる。

学生になるには、特定非営利活動法人しまの大学の会員規約への同意が必要。

- ・ 正会員 年会費：10,000 円
- ・ 賛助会員 年会費：5,000 円
- ・ 学生会員 年会費：500 円

■ポイント・工夫している点

- ・ 島でありながら、造船工場に働く島民が多かったこと、外国航路に就職する弓削商船高等専門学校などの卒業生などを多く輩出した気風もあり、オープンで進取の精神がベースにある。
- ・ 長い間、島おこしに取り組んできた村上律子さんらの活動の上に、島外からの若者の気概が刺激となり、しまの会社やしまの大学といった、革新的な展開につながっていった。

■課題と今後の展開

- ・ 村上律子さんというスーパーウーマンのパワーが島おこし推進の原動力となってきたが、さらなる展開のためには、次の世代への継承が不可欠である。
- ・ 取材当時、都会に出ていた村上さんの娘さんが島に戻ってしまで Café を手伝っており、世代間継承の未来を予感させた。
- ・ 弓削島は「しまなみ海道」という本四架橋ルートからははずれているため、フェリーに頼らざるを得ない。生活圈・経済圏としては、尾道市（広島県）とのつながりが強いが、弓削島～尾道のフェリー運航の将来があやぶまれている。

連絡先	しまの会社（代表 兼頭一司） 住所：愛媛県上島町弓削下弓削 830 番地 電話番号：0897-77-2232 メール：info@kibounoshima.jp http://www.kibounoshima.jp/kaisha/ （しまの会社） http://www3.ocn.ne.jp/~yugesio/ （NPO法人弓削の庄） http://www.shimanodaigaku.org/news/yugejima/ （しまの大学）
-----	--

No. 17)

事例名	やねだん
地域	鹿児島県鹿屋市（柳谷地区）
実施主体	柳谷町内会
活動要約	過疎地域の村において、土着菌を活用した環境対策や芋焼酎開発、地域見守りなど、子どもから高齢者までが参加する地域再生活動を精力的に展開
主な分野	「地域再生」
主な関係者	運営者：柳谷町内会自治公民館（館長：豊重 哲郎） 参加者：町内会住民
キーワード	地域活性化／自主財源／プライベートブランド

■活動のきっかけ・経緯

- ・「やねだん」の活動は、平成8年にこの活動の牽引者である豊重哲郎³さんが、立候補もしてないのに圧倒的支持で柳谷自治公民館の館長に推されたことに始まる。
- ・公民館館長はこの集落をまかされる自治会長でもある。通常65歳前後の人がなるのが慣習であったが、豊重さんはこのとき55歳であった。異例の若さで住民の期待を集めたが、また、この地区は異例を選ばざるをえないほど改革の必要性があったということでもある。
- ・集落を変えていこうと本気で考えた結果、豊重さんが打ち出した改革の出発点は2つある。1つ目は、自主財源確保のための「休遊地を利用した高校生クラブによるからいも作り」、2つ目は、集落の活動拠点づくりとしての「でんぶん工場跡地である町有地を借りて造成する、わくわく運動遊園づくり」である。この遊園づくりは、有線放送のスピーカで地区住民に呼び掛けて始めた。これだけでかなりの人が集まったという。この地区には以前から相互に協働する精神が下地としてあった。これらの2つはいずれも住民の経費負担なしということで一歩を踏み出している。

■活動内容

●活動概要

- ・この活動は、鹿児島県大隅半島の内陸部にある柳谷地区（現地呼称：やねだん、人口299人、高齢化率34.1%）が、疲弊した状況から集落全体が生き生きと暮らしを送る、輝くような集落に変貌していくプロセスの全体である。
- ・豊重さんが公民館館長に就任した当時の柳谷集落は、コメの減反推進役⁴として割り当てクリアの説得に回ると自治公民館から脱退すると申し出があったり、畜産が盛んであったため強烈な悪臭やハエのまん延が地域の問題となっていたりする状況であった。悪臭とハエの問題では行政にも訴え続けてきたが改善されず、牛・豚の糞尿のたれ流しには集落民も困り果て、地元の中学校の職員室はハエ取り紙のオンパレードであるなど、重く出口が見えない状況にあったという。

³ 豊重さんは地元の商業高校を卒業後、東京都民銀行に入社。その後、ふるさとUターンして、うなぎ養殖を手掛けていた。

⁴ 当時、国の政策としてコメの減反が進められ、自治公民館長も減反推進の役目があった。

- ・ 豊重館長はまず、公民館の組織に、既にあった高齢者部や畜産部など4つの部のほかに新しく文化部を加えている。この部の下には「高校生クラブ」と「イベント部」を置いた。また、大人の知恵を集落づくりに役立てるために、自治公民館役員全員、児童民生委員、小中学校PTA代表、幼児の父母代表、PTAのOBの計28名からなる「集落民会議」を設置している。この顔ぶれは住民総参加にこだわった結果だという。新設した文化部の「高校生クラブ」が「からいも作り」につながっている。
- ・ この地区の一連の活動を大括りに拾うと次のようなものがある。いずれも豊重館長の着想でスタートしている。
 - ①からいも生産による自主財源の確保
 - ②わくわく運動遊園という集落民の活動拠点の確保
 - ③荒れた中学生の対応から、外部講師による塾である「寺子屋」の開設
 - ④シンプルでかつ有効性の高い、高齢者に向けた緊急警報装置の設置（その後、用途を拡大）
 - ⑤畜産農家からの悪臭対策のための「土着菌」製造（その後、販売開始。鹿児島大学が協力）
 - ⑥プライベートブランド「芋焼酎やねだん」の開発・販売
 - ⑦空き家を活用した「迎賓館」（全6館）の開館と、そこへのアーティストの誘致
- ・ 「迎賓館」をつくり、そこへアーティスト（画家や陶芸家）に住んでもらうことにしたことで集落の感じが大きく違ってきたと副館長の西倉さんは話す。アーティストは集落外での活動も多いので面白いアイデアが出るし、彼らの提案で芸術祭も開くようになったと話す。



<迎賓館6号館の前に立つ豊重館長>



<土着菌の山を調べる豊重館長>



<わくわく運動遊園>



<落ち着いた佇まいの迎賓館4号館>

●豊重館長の活動の仕方と考え方

(1) 最初に高校生クラブで「からいも作り」を始めたが、その理由として、「この地区特有かもしれないが」と前置きしながら、当時この地区でもパソコンの前でゲームをする子どもたちが多く、「陰にこもる感じになって、あるべき姿がどうも違うのではないか」と思っていたと語る。チームプレーをさせたいと思い、その入口はどこにすればいいか考えていた。学校の休みは年間170日ほどもあり、スポーツの感覚を感じてもらう以外はないと思い、チームプレーの拠点があればいいのだとの考えに至ったという。

(2) 地区内の荒れた中学校の事態收拾を依頼された。このとき豊重館長は事態の原点に遡って解決を図ろうとしている。校長や教育委員会の関係者をすべて閉め出して、12人の問題中学生と公民館で1人対峙した。命がけだったと語る。この対峙の中で、そもそもの原因は最初の1人が落ちこぼれて授業がおもしろくなったことで、次いで仲間が増えていったからだを見抜いた。その後、この公民館で外部から講師を招いて「寺子屋」と称する塾を開いて基礎学力を上げていく活動をはじめた。

(3) 人づくりの条件には、「場所」「環境」「自由な発想のスポーツ」の3つがある。私の地域づくりで人を動かす原点はスポーツ、それもバレーボールにある。スポーツでは、目配り、気配り、心配りがなにより大切となると語る。

(4) 何かを仕掛けるとき、仕掛けは3歩先を見据えて構想し、発進（着手）は必ず2歩さがっておこなう。これにより全部・全員をフォローする。これを実行するためにも、活動資金は自己資金でなくてはならない。外の資金を使うと、実態の進捗度と関係なく期限を切られ、また、報告のために分かりやすい成果を求めらるようになってしまい好ましくないと語る。

(5) 地域再生や活性化は、基本は身近な人でやることである。

(6) 夢物語を現実にすることが活動の原点にある。自分でもよくやり切れたものだと思うことがある。

(7) 村づくり・地域づくりは次の3点を基本におくことが大事である。

- ①企業経営の感覚を持つこと。これがないと村づくりは出来ない。具体的には企業と同じで、組織、定款、資本金、帳簿（数字でモノが言えること）が揃っていることである。
- ②活動を外への依存に頼りすぎないこと。依存だけでは地域性がなくなる。プライベートブランドが

必要な所以だ。「自分はこれでやる」をベースにすれば自分の発想を9割にできる。

③担保してくれるから人が動く。会費、経費を出させないことを担保すること。出資はいらないが、体験、休遊地の提供、労働などを出してもらうことを呼びかける。同時に、これにより先々がこんなに拡大するということも示さねばならない。

(8) 村づくりのリーダーはポリシーを持っていなければならない。ポリシーとは政策論であり、過去および現在の実態と合っていることと、20～30年先までをどうやってつないでいくかを満たしていることが必要である。処方箋にこだわる活動は、イベントや伝統の維持・保存になりがちで、先へのつながりが薄くなる。あちこちで「満足は後退である」と言っている。想像させて夢を次へ発信することが大事である。

(9) 人は感動で動くと思っている。感動させることも考えるが、その前に仕掛け人本人がそれを味わえたとき他人も同調するのである。鳥肌が立つくらい感動しないと伝わらない。「本気」「やれるという自信と誇り」「発進を2歩下げること」が必要である。

(10) 日本は「①義務教育の徹底、②治安の徹底、③義務納税の徹底」の3つで成り立っている。やねだん地区もこれに沿って継続を考えている。

(11) 館長の父親は集落の外にもよく知られた知名度のある人であったという。経済的には貧しい中で、ボランティア精神のかたまりで、面倒見がよく、PTA会長も務めるなど、走り回っていたと話す。

しつけには厳しく、正直者は報われると思っており、喧嘩をして負けて帰ると「負けるな、逃げるな」と叱咤されたという。母親はこのような父親をいかにフォローするかに苦心する人だったという。

豊重館長は、自分に今知恵が出るのはこのような環境のおかげだろうと話す。

■課題と今後の展開

たいがいの活動に見られる後継者問題は、やねだん集落ではないという（西倉副館長談）。既に数名の若い後継者候補が育っている。次のリーダーへのスムーズなバトンタッチが残っているだけである。

連絡先	柳谷町内会自治公民館（館長：豊重 哲郎） 住所：鹿児島県鹿屋市串良町上小原4964-2 電話番号：0994-63-1731 メール：toyoshige@mail.yanedan.com
-----	---